

ぼくの探しもの

2008.11.19



てんとうむしの、てんてん は、太陽を見上げました。

ねーねー。

太陽さん？

ぼくの てんてんは、どこへ行っちゃったんだろう？

太陽さんは、困ったように 微笑むだけでした。

てんてんは、泣きそうになりながら、だんご虫に 尋ねました。

ねーねー。

だんご虫くん。

ぼくの てんてん、見なかった？

だんご虫くんも、困った顔をして てんてんから 目をそらし、
急に 思いついたように まあるくなって、ころころ 転がっていきました。

てんてん は、てんとうむしのくせに、
背中の中、まるで黒い模様がありません。

てんてんの おにーちゃんにも、おねーちゃんにも、弟や妹にさえも、
立派な「てんてん」が 背中に あるというのに。

てんてん の 羽には、いつまで待っても
黒くてまるい「てんてん」は あらわれてはくれませんでした。

てんてんは、自分の「てんてん」を探して、旅に出ました。

旅の途中、いろんな動物たち、植物たちに 声をかけて歩きました。

ねーねー。
ぼくの、てんてん、知らない？

そんな問いかけに、だれも答えることができません。
みんな、困った顔をして、そっと てんてんから 離れていくのでした。

旅に出て、どれくらい 経ったことでしょう。

ある晩。

夜露にぬれた葉っぱの上で
歩き疲れた てんてんが 眠っていると、
三日月さんが、そーっと てんてん の そばへ やってきました。

てんてんが ぐっすりと眠っているのを見た 三日月さんは、
てんてんの耳元で ささやきました。

てんてん、てんてん。
君は、てんとうむしではないんだよ？
背中に「てんてん」がなくても、悲しむことはないんだよ？

うーん。

眠りながらも イヤイヤをする てんてんを、
三日月さんは、不思議な光で 穏やかに 包みました。

そして、てんてん の 頭に、金色に光り輝く王冠を そっと 授け、
三日月の角で、ちょん ちょん ちょん と、3回 優しく 突っつきました。

三日月さんは、しばらく てんてんを じっと 見つめていましたが、
やがて、静かに微笑んで、お空へ帰っていきました。

翌朝、てんてんを心配した 太陽さんが、
いつもより ちょっと早めに 森へ 姿を あらわすと・・・

てんてんが眠っていた 葉っぱの上には、
光耀くクリソコラが、にこにこ 笑って 座っていました。

